

1. コラム「論点提起」：ゆるやかにつながる居場所づくりや如何

最近、「孤立死 / 孤独死 / 無縁死 / 独居死」の記事を目にするようになった。用語的には、「孤独」は心情的/主観的状况表現であり、他人からみて本当に「望まない孤独」であったかどうかはわからない。これに対して「孤立 / 無縁 / 独居」は外部からみえる客観的状况表現と云える。

参考：高齢者の「孤独死」6.8 万人 年間推計、警察庁が初調査 時事通信 2024 年 05 月 14 日
JIJI.COM <https://tinyurl.com/2bacpeyf>

最新の内閣府の全国調査「孤独・孤立の実態把握に関する全国調査（令和5年人々のつながりに関する基礎調査）」https://www.cao.go.jp/kodoku_koritsu/torikumi/zenkokuchousa/r5.htmlによると、「孤立」の状況については、①同居していない家族や友人たちと直接会って話すことが「全くない」と答えた人の割合は 9.2%、②社会活動への参加は「特に参加はしていない」と答えた人の割合が 51.8%、③日常生活に不安や悩みを感じていることが「ある」にも関わらず、「支援を受けていない」と答えた人の割合は 86.7%となっている。この支援を受けない理由として、「支援が必要ではないため」（63.7%）が最も多いが、この認識自体が孤立化の前兆なのかもしれない。「声を上げられない」「声を上げたいと思わない」という最も難しい実態把握の壁とも理解できる。

一方、孤独感は、「男女・年齢階級別にみると、男性では30歳代及び40歳代、女性では20歳代で高い」。そして、現在の孤独感に影響を与えたと思う出来事の上位は、「家族との死別」、「一人暮らし」、「心身の重大なトラブル（病気・怪我等）」となっている。つまり、全世代問題である。

こうした背景には、働く場/働き方の急激な環境変化による組織（会社・団体等）の中の人間関係や組織を通じた社会とのつながり（社縁）の希薄化、コミュニティ衰退による地域社会におけるつながり（地縁）の希薄化、少子・独居化による家族・親族とのつながり（血縁）の希薄化（象徴的事象として「身寄りのいない高齢者」の増加等）があると思われる。母校とのつながり（学縁）や趣味を通じてのつながり（趣縁）は濃淡色々ある。総じて、「無縁社会」への流れである。

学問的成果の一つとして云われる「自己同一性確立の中断 ⇒ 社会的に孤立 ⇒ 望まない孤独に陥る ⇒ うつ病に罹る ⇒ 自殺（重要要因）」という流れを断ち切るには、社会的な孤立状態に陥ることを防いだり、陥っても脱する手立てとなる「ゆるやかなにつながる」ネットワーク（Real/Virtual）が不可欠である。ネットワークはノード（居場所）とリンク（モビリティ/アクセシビリティ）で構成される。多様なモビリティにより、「個」としての「役立ち感/尊厳」を持てる多様な居場所が選択でき、そこに集うことで孤立感ひいては孤独感が下がるのではなかろうか。

孤立・孤独はユニークであることを鑑みれば、家族/世帯、組織（企業等）をベースにした従来の社会保障制度をはじめとする社会システムの制度設計には限界があり、個人ベースに切り替える必要がある。そのためには、多様な対応が可能なソーシャルビジネスによる支援サービスの仕組みの構築が望まれる。いつまでも、「民生委員」に代表されるような無報酬制度には持続性はない。

社会の実態にあった「ゆるやかにつながる居場所づくり」に向けて仕組みを切り替えられるや如何。